

# 幕末史の落丁を埋める

雲井龍雄

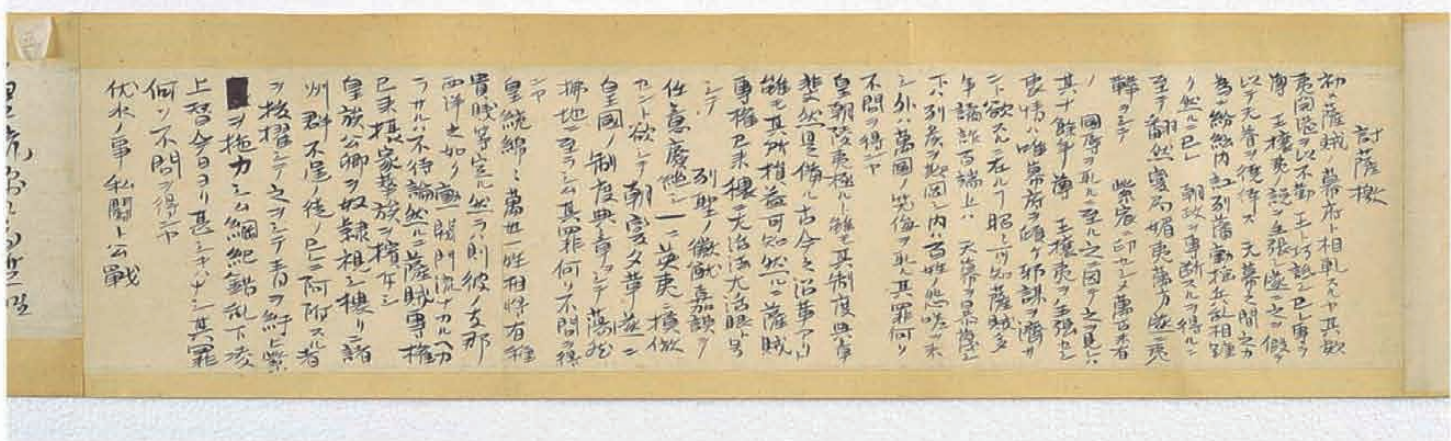
上



「(雲井) 龍雄という人は、…中略…三計塾という塾で塾頭を務め、とてもいい人脈を握っていたんです。頭は切れるし、人脈もある。米沢藩の探索方として、外交的に藩を動かしていくにはうつつつけの人だったんです。が、惜しいことに龍雄が乗り出したときには幕末の大勢がだいたい決まっていたんです。薩摩、長州の倒幕という方針が決まっておりまして、つまり龍雄の活躍する場所は限られてしまった。だから志士としての龍雄の活動はやはり一流のものに終わらざるを得なかったと思います」

## 奥羽越の大義伝える「討薩檄」

雲井龍雄が1868年に書いたげき文「討薩檄」  
(米沢市上杉博物館所蔵)



えている思想がグローバルな形で歴史の後世に残されることになったと考えられるからだ。その仕事自体、決して「一流のものではなかったと思えるからである。

では「討薩檄」の内容を見ていくことにしたい。冒頭から激烈ながらも理路整然とした言葉が続く。難しい文章表現になっているが、その雰囲気にあえて触れていただくため、原文のまま引用してみたい。

「初メ薩賊ノ幕府ト相軋スルヤ、其款夷開港ヲ以不勤王ト巧詆シ、己レ専ラ尊王攘夷ノ説ヲ主張シ、遂ニ之ヲ假テ以テ天眷ヲ僥倖ス、天幕之間、之方為ニ紛紜内訌、列藩動揺、兵乱相踵ク、然ルニ己レ朝政ヲ專断スルヲ得ルニ至テ翻然變局、媚夷方遂ニ夷鞞ヲシテ紫禁ニ印セシメ、万古未有ノ國辱ヲ取ルニ至ル、之ニ因テ之ヲ見レハ其十餘年、尊王攘夷ヲ主張セシ衷情ハ唯幕府ヲ傾ケ、邪謀ヲ濟サント欲スルニ在ル事、昭々可知、薩賊多年譎詐百端、上ハ天幕ヲ暴蔑

え、下ハ列侯ヲ欺罔シ、内ハ百姓ノ怨嗟ヲ来シ、外ハ万国ノ笑侮ヲ取ル、其罪、何ゾ不問ヲ得ンヤ；以下略」

か。「薩摩は、最初尊王攘夷を主張して、幕府の開国をおととして批判していたのに、朝廷の理念的な力を利用して自分たちが権力を握ると開国を主張し始めた。平気で矛盾することをやつてのけ、朝廷と幕府を欺き、民を混乱に陥れ、外国の笑いものになっている。この罪を問わなくてはならない。」

この後もさらにげき文は続き、最後に「是に於て、敢て成敗利鈍を問わず、奮つて此義拳を唱う」、つまり「勝ち負けや利害を問わずに、この義拳を主張する」という極めて倫理的な言葉をしっかりと結語へとつなげている。京都を中心に諸藩の情勢を探索方の目ですっかり凝視しつづけていた雲井だからこそなした仕事である。

ここで雲井の人となりと略歴について触れておかなければならない。

雲井龍雄(本名小島龍三郎)は、米沢藩士の父・中島惣右衛門(平勘定)、借物蔵役など6石3人扶持と屋代家次女・

たという。また65年、米沢藩の江戸藩邸に出仕の折、安井息軒の三計塾に入門。儒学や漢詩を学んでいる。漢学の造詣が深く、作った漢詩はかなりの数に上る。

戊辰戦争で敗れると、米沢で禁固の身となる。69(明治2)年に謹慎を解かれて興讓館助教となるが、わずか2カ月で辞任し上京。その後、立法府である集議院議員に任じられた。しかし、薩長出身の政府要人とつながりがある議員が多いうち、起草した「討薩檄」や転戦歴などが災いし、ひと月足らずで議員の職を追われることとなる。

70年2月、東京・芝の上行、円真両寺門前に雲井は「帰順部曲点検所」の看板を掲げ、「脱藩者や旧幕臣に帰順の道を与えよ」と4回にわたり政府に嘆願書を提出。これが政府転覆の陰謀とみなされ、翌年4月に謹慎を命ぜられる。さらに米沢藩に幽閉のち東京に送られ、深く取り調べもされないまま、罪名の根拠としては政府部内の準則にすぎない「仮刑律」が適用され、判決2日後に小伝馬町の監獄で斬首刑に処されてしまったのである。享年27であった。

とここで雲井龍雄の名は68年秋ごろから用いたものである。生まれが辰年辰月辰日から「龍雄」とし、「龍が天に昇る」との気概をもって自ら付けたと言われている。(編集出版工房「書肆犀」主宰・岩井哲、上山市在住)

# 「一流」の仕事にあらず

「薩賊」を書いた1868(慶応4)年6月11日と書く状況下だった。時点では、まだ御一新の行く末は予断を許さない状況にあつたからである。ニューヨークタイムズの記者でさえ、輪王寺宮を擁する「北方政権側」(奥羽越列藩同盟軍側)を擁する「北方政権側」(奥羽越の大義とそれを支

引用者注)が優勢である」と書く状況下だった。つまり講演での藤沢さんの言葉は、戊辰戦争の結末が見えている現在からのものではなかったのか。

雲井の肉声が、現在の私たちにさえ生々しく届く表現である。意識すると以下のようになろう

八百の2男2女の次男として米沢袋町に生まれてくる。14歳で叔父・小島才助の養子となり、小島龍三郎を名乗る。幼少の頃より勤勉で、藩校興讓館の蔵書を読み尽くしたと伝えられている。親孝行で他人にも親切であつた。一つは、雲井が「討

筆者はこの記事をすつと後で知つたのだが、雲井の活動を一流と表現したことには戸惑いを覚えた。もちろん創作としての小説と歴史記述はイコールでないことは分かっているが、そう感じた理由には二つの背景があつた。一つは、雲井が「討

# 幕末史の落丁を埋める

雲井龍雄

下

ここからは「討薩檄」が起草されるに至るまでをつづりたい。

安藤英男著「新稿雲井龍雄全傳」の年譜を見ると、雲井は1868(慶応4)年5月3日には藩命によって探索方として京都で活動していたが、その日のうちに東下、つまり江戸へ向けて出立したとある。当初はまた京都に戻る予定であったようだが、ところが、旅の途中で仙台、米沢両藩が中心となって、理不尽にも朝敵の汚名を着せられた会津、庄内両藩を助けようとしているという情報(奥羽列藩同盟結成)を耳にし、京都に戻る計画を断念。大雨の東海道を江戸に急ぎ、その後、一路奥羽に向かう決心を固めることになる。

ところが、5月15日に起こった上野戦争後の江戸市中はほぼ新政府軍に制圧されており、陸路で奥羽に向かうのは難しい状況であった。そこで雲井は5月19日、夜気にまぎれて米沢藩所縁の江戸屋敷に潜行。そこで同盟関係にあった仙台藩に、品川港に停泊している長鯨丸への乗船のあつせんを依頼した。幸いにもそれが実現し、雲井は翌日の日記「瘴癘紀行」に「仙邸ヨリ吉報アリ」と記すことができた。その後、仙台藩の重臣で主戦派の大重信太夫に「君ハ雲井龍雄ニアラズヤ」「危ヲシ、舟ニテ去レ」と変装の要を告げられ、車力(荷役人夫)に扮して「仙邸ヨリ濱殿ニ入り、夜ニ乗ジテ長鯨丸ニ入ル」と、その時の様子を日記に詳しくつづっている。仙台藩が危険を冒してまで雲井の奥羽行きのために便宜を図ったのだ。雲井がそれだけの人物と認められていたことを物語るエピソードであろう。

## 「討薩檄」、加茂軍議のさなかに起草

長鯨丸の船内は、そうそうたる顔ぶれだった。上野戦争で辛うじて難を逃れた輪王寺宮公現法親王や旧幕府艦隊を統括する榎本武揚、旧幕府遊撃隊長として転戦を重ねていた人見勝太郎。さらに会津、仙台、庄内、唐津、松山の各藩士らが同乗していた。その場面を想像するだけでも、雲井がただならぬ存在だと分かる。米沢藩が差し向けた一介の探索方ではない下級武士という出自を考えれば、なおさらのことである。

船内では連日、あくまで新政府軍との徹底抗戦を貫こうとするメンバーによる重要会議がもたれた。とりわけ5月25日の徹夜会議で輪王寺宮の奥羽行きが決まったとされている。その会議に雲井も出席していたことはあまり知られていない。

その作戦会議後、一行は平潟に上陸し会津へと向かうが、雲井は一行とひとまず別れ、急ぎ米沢をめざす。6月1日に城下へ入り、藩庁に京都や江戸の情勢をつぶさに報告。この時初めて輪王寺宮奉迎について上申した。

その後、雲井の動きはさらに慌た

だしくなっていく。翌朝早く輪王寺宮奉迎のため、かごで会津若松城下に急行し、宮に拝謁を賜り、魚酒を賜っている。7日に会津から再び米沢に戻り藩庁に報告し、8日には北越戦線の米沢藩軍本陣の千坂高雅総督に会うべく越後へと急ぐ。長岡城攻防戦はすでに開始されていた。

それに先んじて加茂(現新潟県加茂市)では、5月から会津藩家老一瀬要人の要請を受け、長岡城奪還に向け、会津、米沢、長岡、桑名、村松、上山の各藩代表が、大庄屋市川邸に集って重要な軍議を開いていた。この同月22日からの軍議は通称「加茂軍議」と呼ばれている。北越

の中でも加茂が軍議の場選ばれたのは、京都所司代を勤めた桑名藩の預り領であったからだと考えられる。

資料によると、会議は冒頭から大いにもめたところがある。そこで苦境を脱すべく流れをつくった人物が、長岡藩家老河井継之助だ。会議の混乱を收拾し、同盟軍の結束を図り、北陸戦線におけるキーマンとも言つべき存在感を示した。

その後、長岡城攻防戦は7月いっぱい繰り広げられることになる。とりわけ知られているのは、7月24日深夜に決行された過酷な八丁沖作戦である。長岡藩兵17小隊約600人と会津藩、桑名藩などの同盟軍が、湿地帯である八丁沖を6時間かけて渡り、山縣有朋の指揮下にあった新政府軍を奇襲攻撃で撃退し、長岡城を奪還した作戦だ。

「討薩檄」は加茂軍議が開かれていた頃、雲井も当地に滞在し、起草したものであった。

それまでも薩摩や長州の謀略や横暴を告発する文書は、奥羽鎮撫軍の九条道孝総督の側に仕えていた戸田主水のような新政府軍内部からの告発も含めていろいろあった。中でも朝廷に上奏すべく奥羽列藩同盟でまとめあげた建白書は大きな意味をもったが、いささか朝廷への忖度に力点が置かれていた感は否めない。

それに対し雲井の「討薩檄」は、なぜ奥羽越諸藩は薩摩や長州と干戈を交えることになったのか、状況的な流れも含めて語っている。自ら得てきた各地の情報分析に加え、安

## 知識総動員、奥羽越を鼓舞

井息軒の三計塾で学んだ儒学や漢詩の知識を総動員し、奥羽越列藩同盟軍を鼓舞すべく書き上げたものだった。

米沢藩の重臣甘糟継成参謀日記を見ると、雲井が起草した「討薩檄」は翌12日、米沢藩総督千坂高雅によって、会津藩の佐川官兵衛と長岡藩の河井継之助に手渡されたとある。つまり、11日に脱稿した起草文は時を経ず、すかさず同盟軍の要人たちの目にするところとなった。

雲井はこの後、薩摩と長州西軍の離間を謀ろうと北関東に向かうのである。



常安寺にある雲井龍雄の墓(左奥)。墓碑には戒名「義雄院傑心常英居士」が彫られている

米沢市

岩井哲、上山市在住

(編集出版工房「書肆犀」主宰)